



連載

知っておきたい「海洋散骨」のイロハ

第3回 海上交通の安全

和田 睦美

一般社団法人 全国海洋散骨船協会 事務局長 / 海洋散骨ディレクター講師

今月号では、船の安全についてお話しさせていただきます。ひと口に「安全」といっても、あまりにも漠然とした話題になってしまいますが、今回は一般的な航海に関する安全と、散骨船ならではの危険とその回避について進めてまいります。

第2回の記事にも引用させていただきましたが、船の安全という話題になれば、皆様の頭に浮かぶのは、やはり昨年の北海道知床の観光船事故ではないでしょうか。こうした事例も踏まえ、安全と危険回避についてみていきましょう。

ライフジャケットを着ていれば安全か

小型船舶では、2018年2月からライフジャケットの着用が義務化されました。しかし、いまだに着用の必要性に対する意識は低いように感じます。

私も海洋散骨をインターネットでよく検索しますが、各社のホームページに掲載されている写真を見ても、お客様がライフジャケットを着けずに暴露甲板で散骨している写真が使用されています。写真キャプションに18年2月以前に撮影された写真であることが説明されていればまだいいのですが、最近の日付が入っていたり、宣伝用のビデオでもライフジャケットを着用しないまま散骨をしているものなどは、むしろ自社の違法行為を宣伝する結果となっています。

国土交通省のホームページによれば、ライフジャケットの着用によって、海中転落時の生存率は2倍以上になるとのことです。

北海道の事故では水温2～4度、ライフジャケットを着用していても、水に浸かって数分で身体は動かなくなり、10～15分ほどで意識を失う状況だったそうです。現在、小型船舶についても海域に見合った安全装備の義務付けを検討しているようです。

が、法として効力を発揮するためには、まだ時間がかかるものと思われます。

海洋散骨には船が必要ですが、自分が依頼する船舶（船長）が最低限の安全配慮をしているかなどについては、自分で確認をする必要があります。

海洋散骨ディレクター講習では、使用する船舶に装備されているライフジャケットは、海洋散骨ディレクターが自分の目で確認するよう指導しています。たとえば、装備されているものは「桜マーク（国土交通省が試験を行なって安全基準への適合を確認したもの）」であるか。膨張式のライフジャケットであれば、ボンベやバルブの有効期限が切れていないかなどがポイントとなります。もし、有効期限が切れているライフジャケットを装備している場合には、必ず船長にその旨を伝え、もし船長が有効期限に対して無頓着であるならば、その船には依頼しないよう指導しています。

また、ライフジャケットを着用していても、走行中に落水した場合、船首付近からの落水であればプロペラに巻き込まれる可能性もあり、船尾からの落水の場合、誰も気が付かない場合があります。

旅客船運航では、ライフジャケットの着用だけでなく、乗客の動きにも常に注意し、危険な場所への立ち入りにも注意が必要です。

散骨船ならではの危険

海洋散骨では、散骨船ならではの危険があります。一般的に旅客船といえば、フェリーや大型クルーザーを想像するお客様が多いと思います。しかし、海洋散骨で使用される船舶のほとんどが小型船舶です。大型の船舶と小型船舶の大きな違いは、小型船舶は波や風の影響を受けやすく、船が揺れることです。散骨船の場合、高齢の方が乗船される確率が高

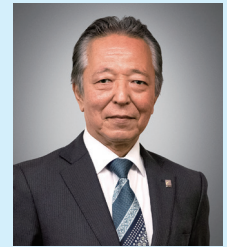


和田 睦美 (わだ むつみ)

全国海洋散骨船協会 事務局長

2016年6月、全国海洋散骨船協会設立とともに事務局長に就任。19年、理事会の要請により「海洋散骨ディレクター」テキストを編纂。

20年1月には、第1回海洋散骨ディレクター講習にて講師となり、現在も継続中



くなります。高齢の方は船が揺れば、つかまっているだけでも大きな負担となります。揺れる海上を通常時と同じように走行していると、お客様は翌日には筋肉痛で腕が上がらないなどということにもなりかねません。

散骨船は、波や風を注意深く予測し、状況によっては勇気ある中止の判断をしなければなりません。一般的な事例として、船長に「今日は船を出せますか」と尋ねて「大丈夫」という答えが返ってきたとしても、船長の言う「大丈夫」は船の性能として問題がないという意味です。船の性能上耐えられるということと、お客様が快適に航海を楽しめるかは別問題です。散骨船の場合には、船長が「ダメ」と言ったら絶対ダメですが、船長が「大丈夫」と言っても、本当に出航するかどうかはお客様をよく知っている散骨の受注者がすべきです。

当日いきなり中止の判断をされると、船長としてはたまったものではありませんので、事前に船長とは散骨についてのコミュニケーションをとり、またお客様の情報もきちんと伝えておかなければなりません。同様に、走行中であっても、お客様がトイレに立つ場合などは、船長に一声かけて速度を落としてもらうなど、船内での転倒事故を防ぐ必要もあります。そして、もう1つ。散骨セレモニーとは、お客様が自ら遺骨を海にお返しすることです。一般の旅客船では、通常お客様は船の手摺につかまって甲板に立っていますが、海洋散骨では船から身を乗り出して、手摺からも両手を離して散骨を行ないます。またご親族などが一緒に乗船している場合、散骨の様子を写真やビデオに映そうと、手摺から乗り出してカメラを構えます。この瞬間が散骨船ならではの危険なときといえます。

もし、船から上半身を乗り出しているときに、足を滑らせばそのまま落水してしまいます。スタッフがそれを支えたとしても、人間1人分の体重を支えようとすれば、助けようとしたスタッフも一緒に落水することになってしまうのです。

これは海洋散骨ディレクター講習で、船舶の運航の部分を担当している講師が講習で話していることですが、船乗りの間では、「片手は他人のため、もう片方の手は自分のため」という言葉があります。つまり、誰かが落水しそうになった場合には、自分も一緒に落水しないために、必ず自分自身が手摺やハンドルをつかんだ状態で手をささなければいけないという意味です（本当は別の意味合いもあるそうですが）。たいへん参考になる言葉です。

同じように、特に小型船の場合、船の乗り降りについても注意が必要です。私が勤務している会社の海洋散骨では、お客様には乗船前に陸上でライフジャケットを装着していただきます。そして、下船後陸上でライフジャケットを回収します。乗船時や下船時には、走行中以上に落水する危険性が高く、接岸時の落水はたいへん危険なためです。

安全は、いくら気をつけてもやりすぎることはありません。少しでも危険が想定される場合には、その危険を回避するための方法をあらかじめ講じなければなりません。特に船長に対しては、航海や船のことについては口出ししてはいけないと思われるかもしれませんが。しかし船長も、お客様に安全で快適に過ごしていただきたい気持ちは同じです。

安全については、散骨スタッフ（海洋散骨ディレクター）と船長をはじめとする船の乗務員とが、日頃からのコミュニケーションを通じて危機感と安全に対する価値観を共有していることがとても重要なのです。

参考文献：海洋散骨ディレクターテキスト、国土交通省ホームページ

■(一社)全国海洋散骨船協会の概要

所在地：東京都渋谷区東3-25-10 T&Tビル／設立：2016年6月／理事長：志賀 司／加盟社数：12社（2023年3月現在）

協会HP／海洋散骨ディレクター講習についてはこちらから →

